

初年次教育と協同教育をつなぐ ー協同という視点ー

関田一彦
創価大学

1. アクティブ・ラーニングのポイントとは

私がお話するのは、初年次教育と協同教育をいかにつなぐかについてです。もっとも、両者のつなぎ方はさまざまなので、一つひとつを挙げてはきりがありません。そこで今日は、私が効果的であると考えつなぎ方に絞ってお話します。私は、アクティブ・ラーニングが初年次教育と協同教育をつなぐ鍵となると考えています。先ほど安永先生もおっしゃっていましたが、協同教育という言葉になじみがなければ、協同学習と置き換えてくださっても構いません。

ここ数年、私たち教師は、学士力や社会人基礎力などと呼ばれる、社会に出てから必要とされる力を学生に育むことを意識して、初年次教育に携わっています。ただ、こうした力は、従来の知識注入型の授業では伸ばしにくいものです。先生方にも、そう感じていらっしゃる方が多いのではないかと思います。知識注入型の授業、いわば一方通行の授業では社会からの求めに応じられなくなっている今、アクティブ・ラーニングは効果的な授業スタイルとして注目されているのです。

では、アクティブ・ラーニングとは何でしょうか。心理学者の溝上慎一先生は、次のように説明しています。『能動的な学習』のことで、授業者が一方的に学生に知識伝達をする講義スタイルではなく、課題研究やPBL (Project Based Learning)、ディスカッション、プレゼンテーションなど、学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する用語」である、と。そして溝上先生は、その具体的な授業形態として次のような例を挙げています。すなわち、学生にコメントや質問、レポートなどを書かせる参加型授業、協同学習 (Cooperative Learning) や協調学習 (Collaborative Learning) と呼ばれる活動を取り入れた授業、課題・問題解決学習や問題発見学習と呼ばれるスタイルの授業、PBLを取り入れた授業などです。つまり、学生が能動的に動くと思われる活動を組み込んだ授業は、全てアクティブ・ラーニングに含まれることになります。

ただここで注意したいのは、単にアクティブな授業をするだけでは、学生は社会人基礎力や学士力などを身につけられるとは限らないということです。一つひとつの活動に学習効果が期待されるエレメントを入れてこそ、学生の力を伸ばせるのだと思います。アクティブ・ラーニングのポイントは、ワンウェイからツーウェイ (教師との問答)、あるいはマルチウェイ (他の人々との問答) と、コミュニケーションのチャンネルを多様に広げることにあると、私は考えています。つまり、教師と学生、あるいは学生同士が、いかにかわるかを考慮する必要があるわけです。そこで、学生が多様な役割を果たせる場を授業につくること、そして学生にその場に参加するよう促すことが、アクティブ・ラーニングを行う上では重要になります。

2. 「参与」を超えて「参画」に至る段階の活動へ

学生参加型授業という言葉は、皆さんもよく耳にするとおもうと思います。教育学者の林義樹先生は、学生参加型授業を、学生の主体的な参加を促す活動が組み込まれた授業であると定義しています。主体的な参加を促す活動は能動的な学習と読み替えられますから、学生参加型授業とアクティブ・ラーニングとはほぼ同義であると、私は考えています。

学生参加型の授業では、授業に参加している実感を学生に得させるしかけや工夫が重要です。そうした実感を生み出す要素を林先生は五つ挙げています。すなわち、「自発性・自主性」「行動性・体験性」「生産性・創造性」「協同性・集団性」「自律性・自治性」です。これらの要素を組み入れた活動に参加すれば、学生は、自分がその活動にかかわったことを、身をもって感じるはずで、自分が参加したという実感を伴った学びは、ワンウェイではなくマルチウェイに向かっていると云えると思います。

もっとも、「参加」と一口に言っても、かかわり方の度合いには差があります。林先生は、「参加」を「参集」「参与」「参画」に分けて考えています。では、この三つはどのように異なるのでしょうか。「参集」とは、身体がそこにあるということです。例えば、今、私の話を聞いてくださっている皆さんは、この会場に「参集」しています。ただ、中には、体は会場にありながら、頭は別の場所に遊離している方がいらっしゃるかもしれません。そういう方は「参集」してはいるけれど、「参与」の状態にはないこととなります。「参与」とは、他者の問いに対する答えを考えるなど、参加した場所で何らかの活動にかかわるということだからです。そして「参画」とは、参加した活動を自分たちでコントロールする状態を指します。例えば、学生が先生の行う活動にただ参加するのではなく、活動を先生と一緒に動かしたり、自分たちだけで動かしたりしてはじめて、その活動に「参画」していると言えるでしょう。

参加型授業、アクティブ・ラーニングにも、学生のかかわり方の度合いによってレベルがあります。かかわりが増すほど、学生はさらに能動的に、アクティブになります。そして、かかわりや能動性が高くなれば、学生の協同性も強まっていくのではないのでしょうか。言い方を変えれば、学生たちの協同性が高まっているアクティブ・ラーニングは、アクティビティへのコミットメントが高いレベルにあると言えるはずで、「参集」を超え、「参与」のレベルに達しているからです。また私は、「参与」を超えて「参画」に至る、あるいは「参与」と「参画」をつなぐ段階の活動こそ、協同学習であると捉えています。

3. 仲間のためにも真剣に学ぶのが協同学習

協同学習の定義を確認しましょう。一般的に、協同学習とはグループを使った指導法であるとされています。ただ、協同学習とグループ学習は全くのイコールではありません。グループ学習の中でも一定の条件を満たす学習、あるいは特定の要素を含む学習が協同学習であると考えられます。満たすべき条件や要素についての考え方は研究者によって多少異なりますが、グループ学習の中に協同学習があるという捉え方は、多くの研究者の見解が一致しているところです。先ほど、アクティブ・ラーニングとは何かをお話したときに、溝上先生がアクティブ・ラーニングの例として協同学習を挙げていることに触れましたが、溝上先生は恐らく、協同学習をグループによる活動を想定した、限定された学習と考えていると思います。

もっとも、協同学習はもう少し広く捉えることもできます。すなわち、自らの学びが仲間の役に立つ、そして、仲間の学びが自分の役に立つ学習である、という捉え方です。こうした協同の

精神を学生が持つことによって、「自分のためにも仲間のためにも真剣に学ぼう」という気持ちが生まれてきます。自分も仲間も一緒に成長していこうとして、学習に励む。これを、広い意味での協同学習、つまり協同教育であると、私や私の仲間の研究者は考えています。つまり、学習活動の形ではなく、目的に注目し、何のために課題を達成しようとするのかを考えようという立場です。

一般的に、学びの目的は自分の能力を向上させることであるとされています。しかし、自分のためだけでなく仲間の利益のために学ぶ、あるいは、自分以外の誰かの利益のために学ぶこともあるわけです。そうした学習事例をいくつか見てみましょう。

一つめは、ジグソー学習です。ジグソーパズルは全体の情報を複数のピースに分けるので、自分の持つピースからだけでは全体はうかがえません。全体像を理解するためには、相手の持つピースから適切な情報を得る必要があります。そして、相手から適切な情報を得るためには、自分が相手に適切な情報を提供する必要があります。つまり、互いの情報提供の質と量が、互いの学びを左右するわけです。これがジグソー学習のポイントと言います。

二つめは、LTD (Learning Through Discussion) 学習です。相手の意見に対して自分の意見を述べる、自分の意見に対して相手から反応がある。こうした互いの応答の質が、互いの学びの深さを左右する学習が LTD 学習の魅力と言えるでしょう。

三つめは、Problem Based Learning です。与えられた課題を解決するためには他者、あるいはチームの協力が不可欠になりますが、自ら能動的に協力しなければ、他者からの協力は得られません。つまり、チーム内の協力が課題解決の質を左右するのです。Problem Based Learning とはそういう学習です。

さらに、PBL (Project Based Learning) やサービス・ラーニングになると、問題を与えられるだけでなく、自分たちでついたり、見つけたりした課題を解決することになります。何のためにそうするかと言えば、自分以外の多くの人のためです。つまり、「自他の利益」を超えた、より大きな「誰かの利益」ということになります。不特定多数の人たちの役に立つことを目指す活動を授業に取り入れれば、その授業は協同性が高く、能動性も高いものになっていくと考えられます。

4. 最後に

初めにお話ししたように、初年次教育におけるアクティブ・ラーニングにはさまざまな形態がありますが、中でも協同教育は非常に重要なものです。そして、協同学習の質を高めるためには、単にグループ内で協力し合う学びを超え、自分以外の誰かのために学び合うという、そういう気持ちを促進し、活性化することが求められます。自分以外の他者のために学ぶという意欲を深められる教育形態が、協同教育なのです。初年次教育における協同教育は、社会で求められる力を学生に育む上で大切なアプローチになると考えています。

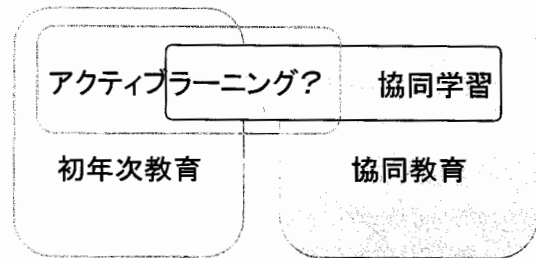
私は、協同教育と初年次教育とのつながりについて、考え方の一つをご案内しました。この後に発表される3人の先生方の実践事例を参考に、皆さん一人ひとりが、つながりの意義や可能性を吟味してくださいと幸いです。

初年次教育と協同教育をつなぐ ～協同という視点～

2011.8.31
創価大学教育学部
関田一彦

1

初年次教育と協同教育をつなぐ？



2

社会人基礎力の能力要素

出典：経済産業省ウェブサイト <http://www.meti.go.jp/press/20060208001/shakaijinkisoriyoku-gaiyou-set.pdf>

分野	能力要素	内容
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的
考え抜く力	課題発見力	現状
	計画力	課題 する力
	創造力	新しい
チームで働く力	発信力	自分
	規律性	社会
	ストレスコントロール力	ストレ
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力

伝統的な知識注入型の
授業では、こうした力は
育てにくい!?



アクティブラーニングとは？

京都大学の溝上慎一氏によると・・・

「アクティブラーニング」とは「能動的な学習」のことで、授業者が一方向的に学生に知識伝達をする講義スタイルではなく、

課題研究やPBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)、ディスカッション、プレゼンテーションなど、

学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する用語

Kawaijuku Guideline 2010.11「教育改進黨」アクティブラーニング特集 p.44

3

4



一方的な講義(たとえば、圧倒的な知識を持つ人が、一生懸命にそれを伝えようとして話続ける状態)は、学生を聞き役(受け身の学習)に固定してしまう?!

ワンウェイからツーウェイ(教師との問答)、
そしてマルチウェイ(自他共の問答)へ

学生が多様な役割(視点・立ち位置)を採れる授業
⇒役割を果たすべき場づくりとその場への参加の促し

学生参加型授業とは：林義樹の定義

学生の主体的な参加を促す活動が組み込まれた授業

⇒授業という場に確かに参加しているという実感

⇒実感を生み出す要素

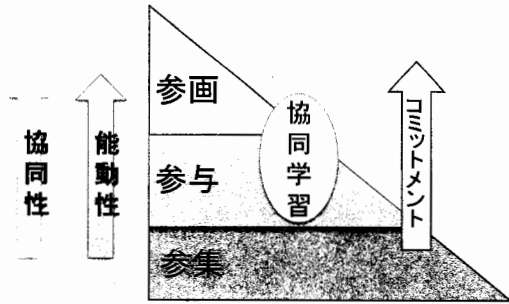
- ①自発性・自主性(学生のイニシアティブで)
- ②行動性・体験性(学生がアクティブに)
- ③生産的・創造的(学生がプロダクティブに)
- ④協同性・集団性(学生がコラボレイティブに)
- ⑤自律性・自治性(学生のオートノミーとして)

現代教育方法事典 (「学生参加型授業」の解説より)

5

6

林の提唱する「参加の三段階」



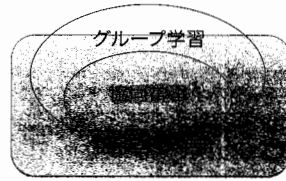
7

協同学習の定義（狭義）

協同学習をグループを使った指導法と狭く捉えた場合、グループ学習の中でも一定の条件を満たす（あるいは特定の要素を含む）ものを協同学習と呼ぶ。

協同の精神（考え方）

自らの学びが仲間の役に立つ
そして
仲間の学びが自分の役に立つ



自分のためにも
仲間のためにも
真実に学ぼう

自他共栄のこころ

民主・共生社会の基盤となる価値観の醸成

8

活動の形ではなく、その目的に注目

何のために課題を達成しようとするのか？

個人的目標 < 自分の能力を誇示するため
< 自分の能力を向上させるため

社会的目標 < 自他の利益のため
< (自分以外の) 誰かの利益のため

9

ジグソー
学習

自分としては、全体像を理解したい。
→ 相手から正しい情報を得ねばならない。
⇒ 自らが適切な情報の提供をせねばならない。

互いの情報が互いの学びを左右する。

自他の利益のために

互いの応答の質が、互いの学びの深さを左右する。

LTD
学習

自分の意見(理解)を述べねばならない。
自分の意見に相手から反応が返ってくる。
相手の反応に対応できる自分でありたい。

10

Problem
Based
Learning

自分は与えられた問題を解決したい。
→ 他者(チーム)の協力を得ねばならない。
⇒ 自らが能動的に協力せねばならない。

チーム内の協力が問題解決の質を左右する。

自他の利益のために

誰かの利益のために

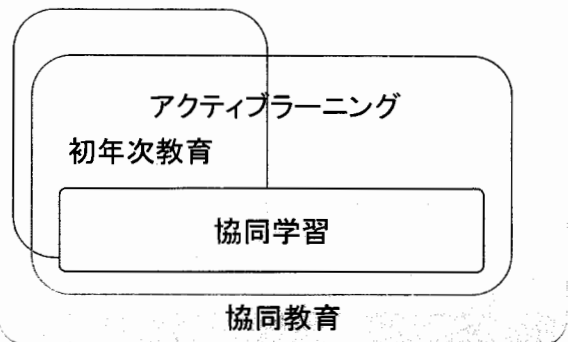
Project
Based
Learning

Service
Learning

自分たちが問題(課題)をつくる(見つける)。
問題=解決することで、誰かが喜ぶもの。

11

初年次教育と協同教育をつなぐ



12